

**後期：現代聖書学の諸問題**

## オリエンテーション

- |                            |       |
|----------------------------|-------|
| 1. 創造論                     |       |
| 2. 一神教                     |       |
| 3. 契約思想                    |       |
| 4. 神殿神学・知恵文学               |       |
| 5. 預言                      |       |
| 6. 研究発表：侯                  |       |
| 7. 研究発表：張                  | 11/30 |
| 8. 研究発表：齋藤 or 南            | 12/7  |
| 9. 研究発表：齋藤 or 南            | 12/14 |
| 10. 研究発表：金、岡田              | 12/21 |
| 11. 研究発表：山下                | 1/4   |
| 12. 終末論・史的イエス              | 1/11  |
| 13. イエスの譬え                 | 1/18  |
| 14. 初期キリスト教と女性             | 1/25  |
| 15. パウロと政治神学 → 火曜日の「聖書演習」へ |       |

**<前回> 預言****(1) 王国分裂とその原因**

1. ダビデ＝ソロモン王朝の分裂（BC.922 年）
2. 内的要因、外的要因

**(2) 預言者とその思想的課題**

3. 祭司、預言者、知者
5. 民族の危機＝契約思想に基づく古代イスラエル宗教の危機

契約思想：神（主・ヤハウェ）とイスラエルの契約

子孫繁栄と土地取得の約束、信頼

→ 約束成就のプロセスとしての歴史

歴史の現実＝国家・民族滅亡の危機（バビロン捕囚、神殿崩壊）

↓

預言者はこの危機に直面して、古代イスラエル宗教の再生という課題に取り組んだ。

歴史意識の転換（契約思想の危機を乗り越える歴史の再解釈）

イスラエル民族の歴史的危機（バビロン捕囚）→預言者による歴史の再解釈（契約違反＝罪と、罰としての滅亡）→イスラエル民族宗教の変革

↓

民族神から、諸民族の神へ（正義の神）。排他的な一神教、メシア待望。

6. 滅亡預言：契約を破ったイスラエル（罪）への罰としての危機
7. 救済預言：救済の約束、契約の更新＝新しい契約 → キリスト教では、イエス・キリストをこの預言の成就と解釈する。新約＝新しい契約

### (3) 預言者の思想

8. 社会正義：正義の神、不正・悪が滅亡の原因となる。

古代イスラエルの宗教＝民族宗教、選民思想

旧約聖書預言者における民族主義とその克服

1) 民族の救いとしての歴史・終末

ダビデ王家の再建 → 救世主（メシア）はダビデの子孫から生まれる。

2) 苦難の僕：民族の相対化と新しい使命の自覚

民族の滅亡と神の正義の普遍性

10. 民族宗教から普遍宗教へ（民族宗教自体の内部からそれを乗り越える動きが現れる）

預言者の平和思想、諸民族の神であるヤハウェ、神は他民族を通して意図を実現する。

## キリスト教と自然科学

<内容>

1. はじめに一聖書と科学一
2. 近代科学の光と影
3. 遺伝子工学の問題
4. おわりに一科学といかに関わるか一

### 1. はじめに一聖書と科学一

1. 聖書の生命理解：土の塵から生きる者へ（神の息）

人間存在の有限性（他者へ依存した存在、生かされている）

<創世記2>

7 主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。

2. 現世中心（現世における生命の充実）と黙示文学（死後の生）

現在と未来との緊張 → 今の快楽を追求する刹那主義的生か、未来のために現在を犠牲にする生き方か

<マタイ8>

18 イエスは、自分を取り囲んでいる群衆を見て、弟子たちに向こう岸に行くように命じられた。19 そのとき、ある律法学者が近づいて、「先生、あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」と言った。20 イエスは言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない。」21 ほかに、弟子の一人がイエスに、「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と言った。22 イエスは言われた。「わたしに従いなさい。死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。」

3. 現世の生命の充実とは？ 神との交わり（本来的な人間関係の回復＝神の国）

4. 聖書から見た科学の両義性：創造の善性（創世記1章）＋墮罪（創世記3章）

原初の善と罪の歪みは、歴史的な「科学」「技術」の中に現れている。

科学技術からは恩恵も害悪も生じる。

5. 聖書から見た農業の意義  
都市文明への懐疑、ハム文明的文明への批判的視点。

## 2. 近代科学の光と影

6. 近代の科学技術の両義性
- ・光：人権概念、自由と民主主義、多くの病の克服
  - ・影：近代と社会的欲望の肥大化
    - 原子力と遺伝子工学
    - 科学技術と欲望の自己増殖
    - ↓
7. 問い直しの試み  
人間機械論からの脱却  
現代を相対化する視点
8. 別のライフスタイルに価値を見出す発想  
ポイントは科学とどのようにつきあうかということ

## 3. 遺伝子工学の問題

<問題はどこにあるか？ 何が問題か？>

9. 島菌進 『いのちの始まりの生命倫理受精卵・クローン胚の作成・利用は認められるか』春秋社 2006 年。  
総合科学技術会議（首相が主宰）の生命倫理専門委員会(1997-2004)  
最終報告書「ヒト胚の取扱いに関する基本的考え方」（2004 年 7 月）  
議論なしに事態が進むという問題
10. なぜクローン技術は宗教的に問題なのか。
- ・神を演じる？ → 自然のプロセスを通じて創造する神、神の共同創造者として人間
  - ・魂の尊厳への冒涇！ → 魂の尊厳とはDNAによって決定されるのか？  
双子問題（アウグスティヌス）
11. 人間の欲望充足はどこまで認めうるのか？ 子供をデザインするのは親の権利か？  
子供の商品化、DNA差別
12. Ted Peter s, *Science, Theology and Ethics*, Ashgate 2003  
ヒトゲノム計画：the Human Genome Project (HGP), 1987-2001
- ・クローニング自体は非倫理的ではない。人間の尊厳とは何か？
  - ・個人の自己同一性を脅かすというよりも、子供の商品化という問題
  - ・「自然的」とは何か、自然＝善か？
  - ・再生医療のもたらす恩恵は多大である。全面的禁止ではなく、一時的な凍結。
13. 岡本祐一郎 「「自己決定」批判に反対！」、『異議あり！ 生命・環境倫理学』  
ナカニシヤ出版 2002 年  
「まず、「自然だ」としても、「それがいい」ということにはならない。これは通常「自然主義的誤り」と呼ばれるもので、「事実（……である）」から「価値（……がいい）」は出てこない」（129）、「「自然」かどうかは、ある意味では、

それが社会的に流通しているかどうかには依存している」、「クローン人間が自然に反している」というのは、トートロジーにすぎない」(130)

「デザイナー・ベビー」は必然なのだ。今後、遺伝子診断は「問題児」を回避するためばかりでなく、「優秀児」を選択するためにも行われるようになる。「試験管内で培養された受精卵の中で、どの受精卵が一番望ましいか。」これが問題になる」(135)、「ケガや病気の際は整形してもいいが、美容目的はダメだ」とは言えない「遺伝子を改造する社会がそこまで来ている。この時、あなたはどうするのだろうか」(139)

↓

#### 4. おわりに—科学といかに関わるか—

14. 反科学ではなく、人間的科学（あるいは市民の科学）へ
15. ヴィジョンを描くこと、キリスト教の社会的責任  
→ チェック機能と知の共同性
16. 大震災と原発：キリスト教会は外部の人々とどのように協力できるのか、あるいはできないのか。天災と人災の間。

#### <参考文献>

1. 加藤尚武『現代を読み解く倫理学』丸善ライブラリー、『脳死・クローン・遺伝子治療』PHP新書。
2. 福本英子 『生物医学時代の生と死』技術と人間。
3. 塚崎智、加茂直樹編 『生命倫理の現在』世界思想社。
4. 岡本祐一郎『異議あり！ 生命・環境倫理学』ナカニシヤ出版。
5. 波平恵美子『医療人類学入門』朝日新聞社。
6. 大林浩 『死と永遠の生命 そのキリスト教的理解と歴史的背景』ヨルダン社。
7. 東方敬信編 『キリスト教と生命倫理』日本基督教団出版局。
8. 関根清三編 『死生観と生命倫理』東京大学出版局。
9. 島藺進 『いのちの始まりの生命倫理—受精卵・クローン胚の作成・使用は認められるか』春秋社。
10. 金承哲 『神と遺伝子—遺伝子工学時代におけるキリスト教』教文館。
11. フランシス・コリンズ『ゲノムと聖書—科学者、〈神〉について考える』NTT出版。
12. 教皇ヨハネ・パウロ二世回勅『いのちの福音』カトリック中央協議会。
13. 秋葉悦子訳著『ヴァチカン・アカデミーの生命倫理—ヒト胚の尊厳をめぐる』知泉書館。
14. ドネラ・H・メドウズ他 『限界を超えて』ダイヤモンド社。
15. 高木仁三郎 『市民科学者として生きる』岩波新書。